

サステイナブルエリアデザインとコミュニティアーキテクトに関する 論考を読んで

西村幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授・まちづくり支援建築会議運営委員長）

1. 応募論文の全体の印象について—52編の論文を読んで考えたこと

まずなによりも、様々な現場で多くの専門家が情熱を込めてまちづくりに打ち込んでおられる姿に心を打たれた。その対象も多様で、都市部の伝統的空間の保全再活性化から農村そのものの再生まで、伝統産業や近代産業の現場から過疎地の空き家、自然再生まで広がりがある。また、仕組みの上でも行政が仕掛けた協議会的なものやファンド的なものから、大学の地域貢献によるものやプランナーとして実際に現場に入り込んでいる実体験の報告まで、多様である。

全国各地で、多様な努力がこの現在の時点でも、続けられているという強い実感を持った。

書き手については、専業の都市計画プランナーや設計事務所を営んでいる建築家が大勢を占めており、これにNPOなどのボランティア組織のメンバー、さらにその後行政や大学に所属する専門家が続くという構図が見える。

おそらくこうした様相が、現代のまちづくりをとりまく現状なのであろう。それは私自身、各地のまちづくりにかかわっているなかで持つ実感と一致している。

こうした背景を持った多くの論文を通読して、まず持つ印象は、おそらく誰でも同じだと思うが、それぞれの論者が抱く対象地域（地元といったほうが適切かもしれないが）に対する強い愛着である。それが様々な仕掛けや工夫を生み、新しい形での地域の関わりを生み出している。学会の論文集に散見される単なる事例調査報告ではない、熱を感じさせてくれる。

しかし同時に、課題も見えてくる。

それはまず第一に、ここで紹介されているような工夫や努力、得られた知恵や確立されつつある手法が構造化されていないことである。それぞれの現場で共通な想いをもちながらも、それぞれ個別に試行錯誤を続け、新しい実績が個別に生み出され、それらを見通せる共通のプラットフォームが未整備なのである。

第二に、こうした現場を持つ人々、それをここでいうところのコミュニティ・アーキテクトもしくはコミュニティ・プランナーというとする、そうした方々を組織化する努力が求められているという点である。

本特別研究委員会が目指すこともこの二点にあるのだろう。その意味で、事態はようやく、個別事象の蓄積からその構造化・組織化へという第二段階に至ったといえるのではないだろうか。

2. いくつかの論文について考えたこと

コミュニティ・アーキテクトに関しては、ボトムアップとトップダウン双方向のまとめ役としてのコミュニティ・アーキテクト像の模索（武田実代子）、集合住宅団地再生に際しての重層的設計（江川直樹）、社会性の回復（青木仁）、ファンクラブとしての役割（永吉守）、「風の人」

ではなく「土の人」として（森川稔）、自己変革を求められるものとして（黒崎晋司）、内外のカタリストによる動態的かかわり（藤島祥枝）、など、それぞれの実践の現場での感懐が伝わってくる論考が多かった。

これに対してサステイナブルエリアデザインに関しては、伝統的空間の継承のための課題整理（鈴木俊治）、開発から持続へ向かう計画パラダイム転換のあらわれ（青木仁）、その持続性を空き家活用に見いだしたもの（亀山芳香）、動態的界限保全として（山下馨）、地元企業コミュニティの関与（高田剛司）、産官学民NPOらによる地域づくりコンソーシアム（古川隆）、「人の力」に帰結するもの（宮定章）、小規模エリアマネジメントの可能性（下田祥裕・原拓也）、サステイナブルアートとしてのゆっくりとした持続発展（椎原晶子）、小規模分散自立生活圏の多重ネットワーク（小林郁雄）など、計画論そのもののあり方を問う射程の長い論考が多かったように感じた。

これまでの各地でのやや個別的な努力を人（コミュニティ・アーキテクト）と方法論（サステイナブルエリアデザイン）に関して命名し、定義を煮詰めていく中で、思想の深化とまちづくり活動の相対化が進んでいくのだという実感を深くした。

これはひとつの始まりなのである。